

# 地域計画学

## 地域計画学 2025 模範解答と出題意図

### 問 1.① 模範解答例

津波で被災した沿岸集落における復興課題について、以下の点が重要である。

- 1) 津波から安全な高台等に新たな住宅地を計画する。
- 2) 地域住民がよく話し合い、丁寧な合意形成を進めながら、新しい住宅地の場所や仕様などを自治体と決めていくプロセスが重要である。
- 3) 自治体は提供する被災者支援の制度を丁寧に説明し、住民は経済状況、家族の状況を鑑みながら、様々な選択肢を検討する（自宅修理、自宅敷地新築、高台新築、災害復興公営住宅への入居など）。
- 4) 関係人口や移住者、災害ボランティアの受け入れ、専門家など地域外とのネットワーク形成が復興には重要であり、住宅再建だけではなく生業再建やコミュニティ再生などの諸点との連携も合わせて行っていく必要がある。

#### 出題意図：

本問では、津波による被災や復興、住宅再建の諸側面にかかる知識を問うものである。すなわち、被災の状況や復興は多様な側面を持つが、これらの中でも高台移転、合意形成、支援制度、地域外とのネットワーク形成、生業再生、心のケア、福祉的課題などの重要な復興課題を複数挙げることができ、論理的蓋然性を持つ記述がなされていることが採点の評価基準となる。つまり復興に関わる知識と論理的展開力を問うものである。

### 問 1.② 模範解答例

地方小都市の中心市街地における商店街の再生について、主にモータリゼーションによりロードサイド型商業施設が郊外にできたため中心市街地の衰退が進んで来たので、以下のような対策が考えられる。

- 1) その地域のアイデンティティ、地域性（歴史、景観や食べ物など）を考慮した魅力ある商品や店舗の開発。
- 2) 高齢化や後継者不足が問題であり、例えば、所有権と利用権を分離することで、移住者や地域の若者の起業を容易にすることが有効である。
- 3) 自治体は、新しい起業者への支援、地方小都市ならではの魅力やメリットの発信、歩行者空間の整備、歴史的建物の保存や関連観光施設の整備などを行い、商店街の再生の支援を行う。

### 出題意図：

本問では、地方小都市の中心市街地における商店街の再生について知識を問うものである。まず、①地方小都市の中心市街地の衰退およびその要因について、また②近年における商店街再生に関する、地域資源の活用や所有権・利用権の分離、様々な自治体による支援の動き等の知識が複数挙げられており、また論理的蓋然性を持つ記述がなされていることが採点の評価基準となる。つまり地方小都市における商店街再生に関する知識と論理的展開力を問うものである。

### 問 1.③ 模範解答例

コンパクトシティとは、都市機能（住宅、商業施設、公共サービスなど）を都市の中心部に集約し、郊外への拡散を抑制することで、効率的で持続可能な都市を目指す都市政策である。公共交通の充実による交通弱者にとっても移動しやすさを確保し、公共施設・住宅を都市中心部に整備する、郊外部から中心部への移住を支援するなどの施策があり、富山市などがわが国における先進地とされる。コンパクトシティの有用性は、居住域がコンパクトであることから、インフラの維持管理、行政負担の提言、環境負荷の低減、積雪地においては除雪コストの削減がメリットとされる。一方で、既に低密で郊外に広がった居住域をコンパクトに短期間で誘導することは困難であり、その実現性について疑問の声も挙がる。また郊外地域や農村部など周縁地域の切り捨てにつながるのではないかとの懸念もある。

### 出題意図

本問では、コンパクトシティについて知識を問うものである。コンパクトシティの定義・概要、具体的な事例・施策の例、その有用性と課題に関する記述が求められる。また論理的蓋然性を持つ記述がなされていることが採点の評価基準となる。つまりコンパクトシティにかかる知識と論理的展開力を問うものである。

### 問 1.④模範解答例

線引き制度は、都市計画区域を「市街化区域」と「市街化調整区域」に区分し、無秩序な市街化の拡大を防ぎ、計画的な都市整備を行うための制度である。都市計画法に基づいており、市街化区域では優先的・計画的に市街化を促進し、市街化調整区域では市街化を抑制する。つまり、市街化区域は、既に市街地を形成している区域か、概ね 10 年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域で、市街化調整区域は市街化を抑制すべき区域である。市街化区域の過大な設定や市街化調整区域における例外規定等の厳格な開発規制が行われていないことが、市街化区域縁辺部および市街化調整区域のスプロールなどを生んでいる。

#### 出題意図：

本問では、線引き制度にかかる知識を問うものである。まず線引き制度の概要が説明され、その目的、市街化区域、市街化調整区域の定義が説明され、同時に制度の持つ課題が説明されていることが求められる。また論理的蓋然性を持つ記述がなされていることが採点の評価基準となる。つまり線引き制度に関わる知識と論理的展開力を問うものである。

#### 問 1.⑤模範解答例

里山の荒廃については、主として農林業の衰退により、不要となった里山の管理が行われなくなってきた。すなわち、燃料革命前の昭和初期には、農業の肥料、材木、また薪や炭の原料の供給源であったが、これらの需要が激減したことが原因として考えられる。また都市近郊地域を中心に近年では産業廃棄物置場や事業所、残土置き場などへの転用も進み、近隣居住域への悪影響も指摘されている。

#### 出題意図：

本問では、里山の荒廃にかかる知識を問うものである。具体的には荒廃が起きた歴史的背景と要因に関する記述、また近年の転用などの動きに関する記述が求められる。また論理的蓋然性を持つ記述がなされていることが採点の評価基準となる。つまり里山荒廃に関わる知識と論理的展開力を問うものである。

#### 問 2 模範解答例

農村部に立地する歴史的町並みが残る集落における課題について、一般的に高齢化や後継者不足、空き家化が進行しており、観光の持続性においても課題を抱える地域が多く、以下のようないくつかの対策が考えられる。

- 1) 観光については、高齢化や後継者不足により観光客を受け入れる施設や体制に難がある地区がある。また逆に過剰な観光地化によりオーバーツーリズムによる生活や空間の管理に課題を抱える地域も少なくない。
- 2) 空間の管理として建物の管理が挙げられる。建物の管理については、歴史的価値を有する民家等では（伝統的建造物群保存地区制度など補助制度があったとしても）修理費の負担が過大であったり、居住環境が良くないために、建物の遊休化、荒廃が進む地域が少くない。
- 3) 観光に関わる住民と関わらない住民の利害の齟齬や、空間管理への負担、高齢化や担い手不足から、地域社会の持続に課題を抱える地域が多い。従って、観光、空間管理、地域コミュニティの関係を問い合わせ直し、新しい仕組みを構築していくことが求められる。例えば、移住者や関係人口による新たな起業や出店など新たな建物・敷地の利用を提案する。

出題意図：

本問では、農村立地型の歴史的町並み集落にかかる知識を問うものである。まず、同地域の一般的な課題、観光、空間管理に関わるそれぞれの課題についての記述が求められ、またさらに、観光、空間管理の関係性を説明した上で、地域社会持続に資するための考え方を問うものである。また論理的蓋然性を持つ記述がなされていることが採点の評価基準となる。つまり農村立地型歴史的町並み集落にかかる知識と、地域社会持続にかかる論理的展開力を問うものである。

# 風景計画学 A

## 模範解答

(1)次の5つの用語から2つ選んでそれぞれ説明せよ。

① 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）

「種の保存法」は、国内および外国産の希少な野生生物の種を保存することを目的とした法律である。この法律は、国内希少野生動植物種と国際希少野生動植物種を指定し、それぞれの種に対して個体等の取扱規制、生息地等の保護、保護増殖などの措置を講じている。

② 尾瀬国立公園

尾瀬国立公園は、本州最大の高層湿原である尾瀬ヶ原や、尾瀬沼、周辺の山々などからなる美しい自然が特徴の国立公園である。特に、湿原生態系としての価値が評価され、ラムサール条約湿地にも登録されている。また、高山植物の宝庫としても知られ、動植物の多様性や、それらを取り巻く環境も含めて、学術的にも貴重な場所とされている。

③ 白神山地世界自然遺産

白神山地世界自然遺産は、人為の影響をほとんど受けていない東アジア最大級のブナ原生林が広がり、多様な生態系が維持されている地域である。特に、そのブナ林は、動植物の生息・生育を支える重要な役割を果たしている。この原生的な森には、貴重な種を含む多種多様な生物を育む森林生態系が形成されている。

④ 自然再生

自然再生とは、過去に損なわれた生態系や自然環境を、保全、再生、創出、維持管理の4つの行為を通じて取り戻すことを目指す活動である。地域住民や専門家などが連携し、地域の特性や自然の復元力を踏まえ、科学的知見に基づいて行われる。

⑤ 環境教育

環境教育とは、環境問題に対する理解を深め、持続可能な社会を実現するために必要な知識やスキル、態度を育む教育のことである。環境教育は、学校教育だけでなく、企業や地域社会、家庭など、様々な場所で行われている。環境教育は、私たち一人ひとりが環境問題について考え、行動していくことが求められている。

(2)以下の①から③の3問すべてに回答せよ。

① 風景を認識する上で、「実像」と「情報」はそれぞれどのように私たちの感じ方や理解に影響を与えると思うか。両者の関係性について、具体例を挙げながら説明せよ。

風景を認識する上で、「実像」は視覚を通じて直接的に働きかける、認識の基盤となる要素である。山々の雄大な形、歴史を感じさせる建物の質感、季節を彩る木々の色彩といった物理的要素は、私たちの感覚に直接訴えかけ、美しい、心地よいといった感情の源となる。一方で「情報」は、その風景に奥行きと意味を与え、私たちの知性や感情に深く作用する。例えば、目の前に広がる穏やかな風景

（実像）も、それが歴史的な合戦の舞台であったという情報を知ることで、単なる美しい景色から、歴史のダイナミズムを秘めた感慨深い風景へと意味合いが変わる。両者の関係は、一方が欠けては成立しない、相互補完的なものである。「実像」は「情報」が根ざすための具体的な「舞台」であり、「情報」は「実像」の価値を増幅させ、私たちの心に風景を深く刻み込む「物語」となる。優れた風景体験とは、質の高い「実像」と、それを豊かにする「情報」とが分かちがたく結びついたときに生まれる。

② 近年、インターネットやSNSの普及、また「世界遺産」などの認定制度への関心の高まりにより、風景認識において「情報」の比重が高まっていると言われている。それはなぜだと考えられるか。あなたの考えを具体的に述べよ。

第一に、インターネット、特にSNSの普及は、風景に関する情報の生成と共有のあり方を根本的に変えた。個人が発見した無名の風景（実像）が、その場所の物語や感想（情報）と共にSNSで発信されると、瞬く間に共感が広がり、新たな価値を持つ風景として社会に認知されることがある。これは、誰もが情報の発信者となり、風景の価値形成に参加できるようになったことを意味する。人々は、訪れる前からハッシュタグやレビューを通じてその場所の「情報」を収集し、その情報を頼りに実像を体験しに行くという行動が一般化した。第二に、「世界遺産」や「国立公園」といった認定制度が社会に浸透したことでも大きな要因である。これらの「情報」は、風景の価値を権威づける強力なブランドとして機能する。情報が溢れる現代において、人々は信頼できる指標を求めており、これらの認定は「訪れるべき価値がある」というお墨付きとして受け止められる。これにより、風景の物理的な魅力（実像）以上に、それに付与された社会的評価（情報）が、人々の関心や行動を左右する強い動機となっている。こうした背景には、物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさや物語性を重視する社会の価値観の変化がある。人々は単に美しい景色を見るだけでなく、その土地固有の歴史や文化（文化的景観）に触れることに価値を見出すようになっており、その結果として、風景の背後にある「情報」への関心が高まっている。

③ 地域にとって魅力的な風景を将来にわたって育んでいくための計画（風景計画）において、「実像」（物理的な環境整備）と「情報」（物語や価値の発信）のバランスをどのように考えるべきか、あなたの考えを述べよ。

理想的なバランスとは、まず計画の出発点として、その土地固有の歴史や文化、人々の暮らしといった「情報」を深く読み解くことから始めることがある。この「情報」の理解こそが、計画の根幹であり、どのような「実像」を目指すべきかの指針となる。例えば、かつて水運で栄えた町の歴史（情報）を読み解いたなら、水辺空間を心地よく歩けるように整備し、当時の賑わいを彷彿とさせる船着き場を復元する（実像）といった具体的な計画が導き出せる。次に、その指針に基づいて行われる物理的な環境整備（実像の創造）は、「情報」を具現化し、人々が五感で体感できる形にするプロセスである。美しい石畳、手入れの行き届いた緑、地域産材を使ったベンチといった質の高い「実像」は、その土地の物語（情報）を説得力をもって語る、何より雄弁な舞台装置となる。そして最も重要なのは、整備された「実像」を舞台として、その背景にある「情報」を多様な手法で発信し続けることである。地域住民が語り部となるガイドツアー、風景の成り立ちを学べるワークショップ、AR技術で往時の様子を再現するアプリなど、人々の知的好奇心を刺激し、風景への関与を促す仕組みを計画に組み込むことが不可欠である。結論として、「実像」と「情報」の理想的なバランスとは、「情報」に基づいて「実像」をデザインし、その「実像」を活かして「情報」の価値を伝え、それによって生まれた地域への愛着が、再び「実像」の維持管理へと繋がっていく。このような「価値の循環」を生み出す計

画こそが、真に持続可能で魅力的な風景を育む道筋であると考える。

## 出題の意図

### (1)次の5つの用語から2つ選んでそれぞれ説明せよ。

本問では基本的な専門用語の理解度を測ることを目的としている。単に言葉の定義を暗記しているかではなく、その用語の特徴を体系的に理解しているかを評価する。また、大学院での研究を進める上で必須となる、先行研究の読解力や議論の基礎となる知識の定着度も確認する。

### (2)以下の①から③の3問すべてに回答せよ。

本問は、風景計画学の根幹をなす概念である「実像」と「情報」というフレームワークを用いて、身近な「風景」という事象を多角的かつ論理的に分析・考察する能力を養うことを目的としている。単に用語を理解するだけでなく、それを現実社会の具体的な現象と結びつけ、自らの視点で思考を深めることを期待している。これら専門的な能力に加え、大学院での研究遂行に不可欠な、論点を整理し、一貫した論理に基づき、明快な文章で表現する基本的な思考能力と記述力も併せて確認する。また、大学院での高度な学修と研究を主体的に進める上で求められる能力を総合的に測ることを意図している。

# 風景計画学 B

Question-B 風景計画の計画と設計

## 模範解答

Question-B 風景計画の計画と設計 Landscape planning and design

以下の内容について A4 の解答用紙を横使いにして作図(平面図1枚、断面図1枚の計2枚)と解答用紙の余白に記述をすること。

① 以下の設計課題について、風景計画学の観点からこのような都市環境の植物園内の生態展示空間の今日的意義について記述せよ。(日本語 200 字程度)

A:

都市における植物園は、従来の収集・鑑賞の場を超え、生態系の理解と環境教育を担う空間として重要性を増している。特に生態展示空間は、植物を単独で示すのではなく、環境条件や相互作用と結びつけて提示することで、都市住民が自然とのつながりを身体的・空間的に体験できる場となる。これは気候変動や生物多様性の危機が進む今日において、人と自然の再接続を促す風景計画学的な実践であり、都市の公共空間における学習性や公共性を高める持続可能なランドスケープの基盤となる。(224字)

② このランドスケープデザインを行う際に配慮すべき事項を 3 つ以上挙げ、記述せよ。  
(日本語各 100 字程度)

A:

(1) 環境条件との整合性

植物の生育に不可欠な土壌・水分・光条件を正確に調査・分析し、その結果を基に適切な植栽配置や管理方法を設計することで、生態的に持続可能で長期的に安定した展示空間を計画することが求められる。

## (2) 没入感と可視性の両立

外部から園内の様子を見やすくする視認性を高めながら、内部では歩行者が植物の生態環境に包み込まれるような動線や景観を丁寧に計画し、観察や体験を自然に誘発する魅力的な空間構成とする。

## (3) 学びと参加を促す設え

解説サインや観察装置、さらに季節ごとの変化を実感できる仕掛けを導入し、来園者が自発的に植物や生態に关心を深め、学びやすく継続的に理解を促す環境づくりを行うことが重要である。

③ 平面図 1 点(設計対象地 縮尺 1/500)と主要部分断面図 1 点(縮尺 1/100)を作図せよ。その際、平面図にはスケールバーと方位を必ず含めること。図面中には歩行者(大人と子ども)と車椅子利用者を含める姿を入れスケールがわかるようにすること。また、計画内容には下記設計条件に沿った植栽設計も含めること。

### 都市環境の植物園における植物生態展示空間の風景計画

開園から 40 年が経過し老朽化が進む都市環境の植物園(図-1)を対象に、植物の生態展示空間としての再生を図る。現状は外部から視認性が低く、内部も狭く区画化されているため、学びの場としての機能が不十分である。本課題では、既存施設の規模は継承しつつ再配置を行い、植物種ごとの標本展示から、環境条件に応じた生態展示へと転換し、巡回ルートを通じて植生の生態を観察・体験できる場の計画・設計を行うこと。

設計では以下の点に留意すること。

- 対象エリア(図-1)について、隣接道路側にある擁壁を撤去し、道路側にセッタバックした広場と管理棟・相談室とトイレを配置する。また、既存の通路を刷新し、敷地中央部に高低差 1m 程度の築山を設け、その周囲を巡回する新たな動線計画を行う。ただし、既存のシンボル樹(移植の困難な大径木の落葉樹)の根元の地盤高を保持し存置保存すること。また、その他の既存樹のうち、約半数の主要な樹木については活用し、改修後の空間の一部を構成するように再配植すること。

2. 敷地の奥側（北側）には、植栽管理での発生材をストックする再資源化ヤードを設定すること、そして、倉庫や作業場、温室を再配置する。
3. 植栽設計において、新たに造成する地形に沿い、レインガーデン、中湿エリア、乾燥エリアのゾーニングを行い、以下の宿根草の候補植物種を各エリアにおける適性の観点から分類し、図面中に記載すること。

候補植物種：

オカトラノオ (*Lysimachia clethroides*)

オミナエシ (*Patrinia scabiosifolia*)

カワラナデシコ (*Dianthus superbus* var. *longicalycinus*)

キキョウ (*Platycodon grandiflorus*)

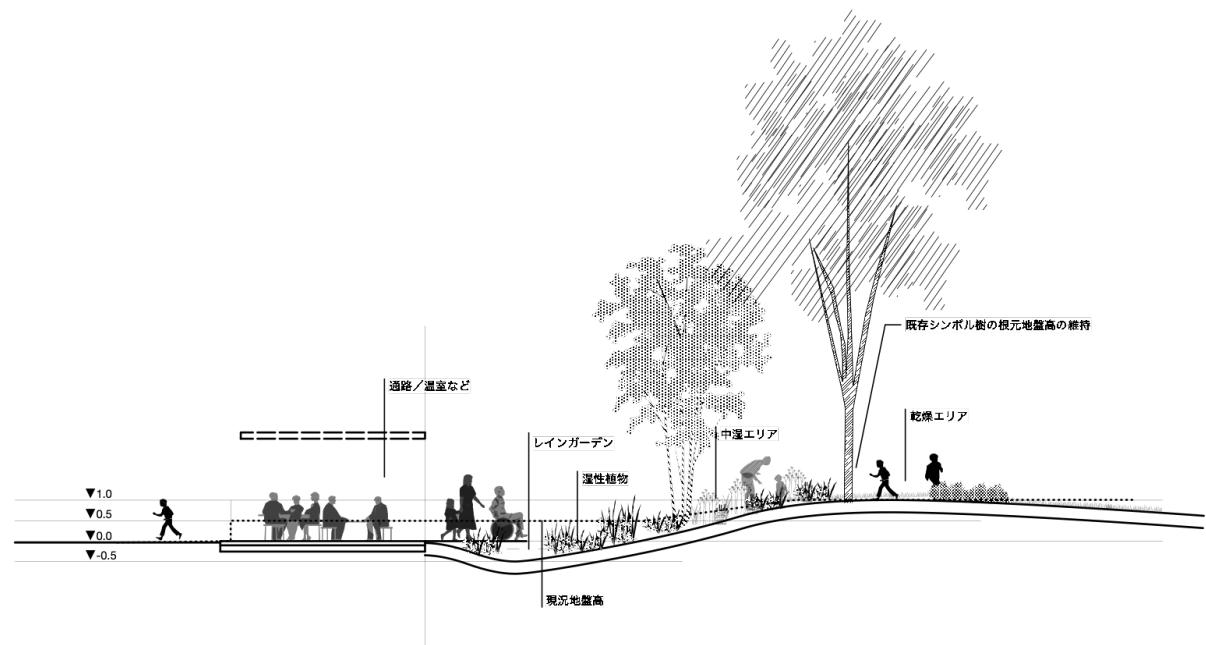
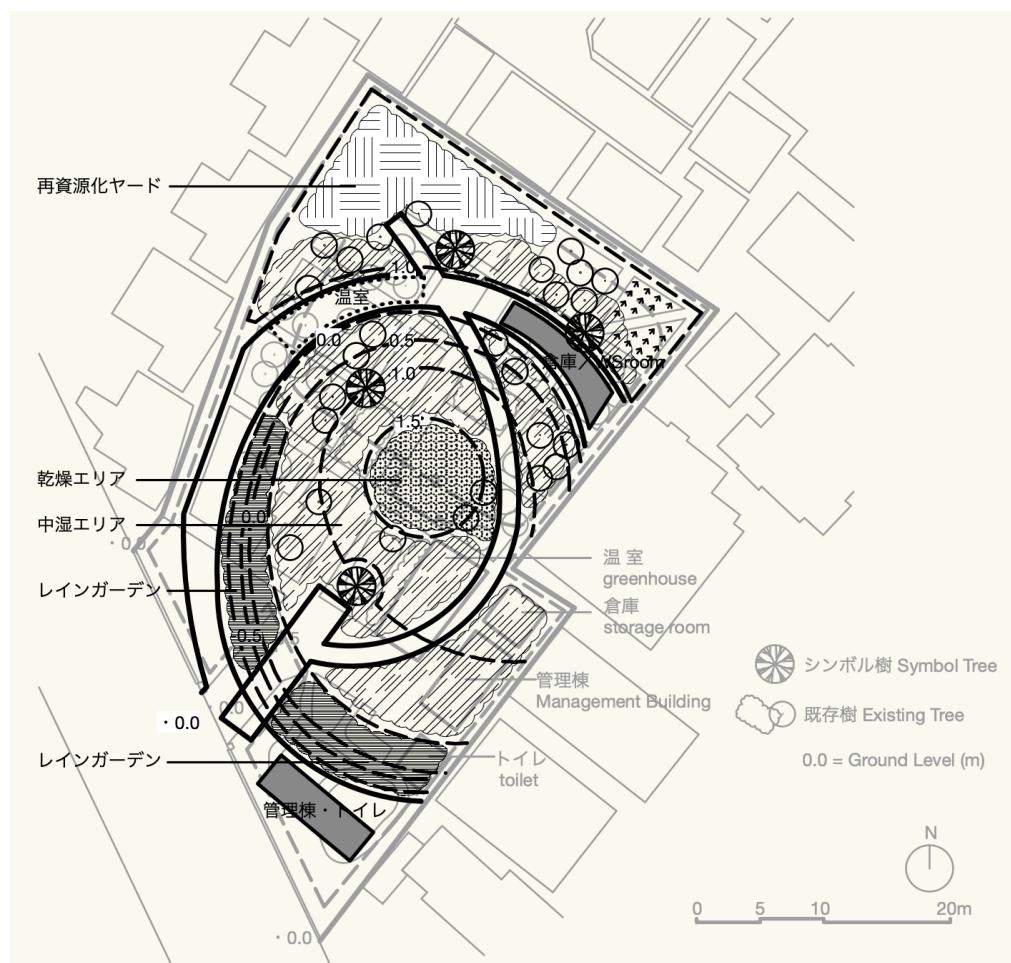
ノアザミ (*Cirsium japonicum*)

ノシバ (*Zoysia japonica*)

ノハナショウブ (*Iris ensata* var. *spontanea*)

ミソハギ (*Lythrum anceps*)

ワレモコウ (*Sanguisorba officinalis*)



### レインガーデン

ミソハギ (*Lythrum anceps*)

ノハナショウブ (*Iris ensata* var. *spontanea*)

カワラナデシコ (*Dianthus superbus* var. *longicalycinus*) ※

### 中温エリア

キキョウ (*Platycodon grandiflorus*)

オミナエシ (*Patrinia scabiosifolia*)

オカトラノオ (*Lysimachia clethroides*)

### 乾燥エリア

ワレモコウ (*Sanguisorba officinalis*)

ノアザミ (*Cirsium japonicum*)

ノシバ (*Zoysia japonica*)

※カワラナデシコが乾燥エリアにあってもOKとする。

### ■出題意図

本設問は、都市における老朽化した植物園を再編するという具体的な課題を通して、現代の都市環境における風景計画の知見と応用力を測るものである。標本展示から生態展示への転換や、体験的な巡回動線の設計を通じて、自然との関係性を再構築するための計画的思考と空間構成力が問われている。また、気候変動や生物多様性の喪失といった今日的課題に応答しうる公共空間の役割を読み解き、それに応じたランドスケープの提案力、すなわち「風景の意味」と「場の機能性」を統合的に捉える力を評価する意図がある。さらに、図面作成や植栽設計を通じて、実務と理論を架橋する実践的能力を確認する狙いも含まれている。